

はるかぜ

障がい児放課後児童クラブはるかぜは、今年で13年目を迎えます。はるかぜは袋井市の単独事業です。行政としては、障がい児放課後児童クラブより放課後等デイサービスの利用を促進したい意向があります。放課後等デイサービスは、令和5年4月現在、袋井市内に19事業所が開所しています。袋井市から紹介がないはるかぜは、年々利用者数が減少することになっています。

しかし、委託を受け開所している限り、子どもたちの成長を見守る事業所として力を注ぎたいと考えています。

- ① 今年度は、昨年に引き続き制作に力を入れ、子どもたちの創造力や手先を使って楽しむような活動を継続していきます。スタッフは、短い時間の中で準備をしなければなりません、集中してスタッフ各自の力を出し、子どもたちと楽しみながら形にしていきます。
- ② 一人の子どもに一人のスタッフが対応することの意味を今一度私たちスタッフが考える年にしていきます。

単なる担当ではなく、「その時間自分一人を見つめてくれる人がいる安心感」は子どもにとって様々な自信を育むことにつながると考えています。また、放課後の週2,3回数時間のかかわりですが、長年続けることで子どもたちの中に自然と信頼関係を育む基盤が出来ると考えています。長年の積み重ねをして、小さな種をまき、育てることにつながることを意識する年にしていきたいです。

次に、子どもたちは全身で私たちを見て感じています。その感じ方や見方について心に残った2つの例をご紹介します。

・コロナ禍前の、まだ、マスクをつける習慣がない時期、花粉症がつらくマスクをしていると、しきりに外すようにアピールする子どもがいました。こちらは、鼻水が大量に出るし、涙も出る苦しさがありマスクは必須でした。しかし、子どもはお構いありません。取ろうと挑んできました。顔が半分隠れるマスクは、人の顔が半分なくなる淋しいものと映ったのでしょう。想像することが難しい子どもからすると大きな問題だったのだと思います。コロナ禍の現在、子どもに与える影響を考えると大きなものがあり今後が気になります。

・かなり体重が減り外見に大きな変化があった方がいました。当然、誰もが気付いているものと思っただけですが、ある利用者さんは、そこに焦点が当たっていませんでした。その人にとって、毎日顔を合わせていることが大事なことで体型の変化はそれほど重要な事では

なかったのでしょう。また、体型といった外見よりその人そのもの（魂）を感じているのだろうか、気づかされたことがありました。

はるかぜは、事業が縮小の一途をたどっていますが、子どもたちの第3の居場所として、楽しく自分自身を表現できる場所・人との関わりを楽しめる場所となるよう、スタッフ一同研修を重ね、事業を継続していきたいと考えています。

また、スタッフ不足から法人内の多くの事業所の方々にご協力をお願いしている状態にありますが、今後ともご協力をよろしくお願いいたします。

（文責 鈴木直子）